

満洲語属格助詞「i/ni」について

中村雅之

1. はじめに

満洲語において、「～の」を意味する属格助詞は「-ng」の後では「ni」、それ以外の場合には全て「i」であり、このことはあらゆる入門書に記されるが、なぜそうなのかという説明に出会うことはほとんどない。最近、吉池孝一(2008)¹⁾が「天聰汗錢」というホンタイジ時代の貨幣の満洲語表記を対象として、この問題に関連する事項を扱った。本稿では主にモンゴル語の正書法の影響という観点から補足的な説明を試みることにする。

2. 概況

まずは吉池(2008)を参照しつつ、問題点を確認しておく。

満洲語の属格助詞は「abkai(天の)」「han i(皇帝の)」など、一般に「i」であるが、名詞が「-ng」で終わる場合のみ「wang ni(王の)」のように「ni」と綴る。後金時代の「天聰汗錢」の銘文に無圈点満洲文字で{SOIRA KAN NI JIKA}すなわち「s re han ni jiha(聡明なる皇帝の錢)」とあるが、そこに記された属格助詞の「ni」が興味深い。通常の規範的表記では「i」と綴られるはずであり、実際、この資料以外に「han ni」と綴る例は知られていない。吉池(2008)によれば、「-n」で終わる名詞に続く属格の「i」は実際には「ni」と発音されたという。「天聰汗錢」の綴りは、貨幣銘文という公式の記録でありながら、習慣的な表記法にとらわれず、実際の発音通りに記された珍しい例ということになる。

問題は、満洲語の正書法ではなぜ「han」のように「-n」で終わる名詞の後でも「ni」でなく「i」と記すのかということである。そして「wang」のような「-ng」の後でのみ、なぜ「ni」なのか。

3. モンゴル語助詞の正書法と発音

満洲文字がモンゴル文字の改良であることは贅言を要しない。そして満洲語の表記法が考案される以前には、満洲人の官僚たちはモンゴル語を用いて記録

1) 吉池孝一(2008)、「天聰汗錢の満文属格語尾について」『KOTONOHA』第68号, 2008年7月.

していたという。これらを勘案すれば、満洲語の正書法に対するモンゴル語の影響を考慮してみることは、当然の手続きであろう。

ここではモンゴル語の属格助詞「yin / u / un」と、対格助詞「yi / i」の状況を確認しておきたい。(属格は満洲語「i/ni」との語法上の対応から、対格は音形の類似から検討対象とする)

属格助詞は名詞が母音で終わる場合「yin」であり、「-n」で終わる場合には「u」、それ以外の子音で終わる場合には「un」である。興味を引くのは、名詞が「-n」で終わる場合、「u」と綴られることである。文語の読音において、この「u」が実際には/nu ~ nü/と発音されたことについては多くの証左がある。満洲文字で表記された各種モンゴル語資料²⁾、漢字音訳された各種モンゴル語資料³⁾、そして『三合便覧』所収「蒙文指要」(1780年)の記述などである。とりわけ「蒙文指要」は、清代モンゴル文語の助詞の読音を満洲文字によって説明している点で最も有用である。そこには、属格助詞の「yin」を実際には「yen」(満洲文字による表記)と読み、「u」を「nu」と読む旨が明記されている。

対格助詞は名詞が母音で終わる場合に「yi」、子音で終わる場合には「i」と表記される。「-n」で終わる場合にも「i」となる。「蒙文指要」によれば、「yi」の実際の読音は「gi」であり、「-n」の後の「i」の読音は「ni」である⁴⁾。「蒙文指要」に示された読音は、他の満洲文字、漢字によるモンゴル語表記でもほぼ同様に記されるから、清代における規範的な読音であったと考えてよい⁵⁾。

2) 代表的なものとして『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』(1780)、『初学指南』(1794)、『三合語録』(1829)がある。これらの資料では「-n」のあとの属格を「nu」と記すことが多い。

3) 代表的な資料は、『御製増訂清文鑑』(1771)など「清文鑑」系統の辞書である。「-n」の後の属格は「奴」や「努」で記される。

4) 満洲文字による資料では、「-n」の後でおおむね「ni」と記されるが、『初学指南』はモンゴル文語と同様に「i」と記している。漢字による表記では「尼」が用いられる。

5) このほか、ハングルで表記されたモンゴル語も当時の読音を知る重要な資料になる。蒙学三書と称される『蒙語老乞大』『捷解蒙語』『蒙語類解』である。そこでも「yin」は「yen」、「yi」は「gi」と表記されるが、本稿で問題にしている「u」「i」は、モンゴル文語と同様にそのまま「u」「i」と表記されている。しかも、「頭・中・(尾)」という構造のハングルとしては異例の、頭音を省いた「u」「i」であって、ちょうどモンゴル文字の語中形・語末形に対応させた形式になっている。なお、ハングルの表記法は満洲文字資料に影響された可能性が考えられるが、現在確認できる満洲文字モンゴル語資料が1780年以降のものであるのに対して、ハングル表記のモンゴル語資料が作られたのはそれよりもやや早いようであり、決定的なことは言えない。

4. 満洲語「i/ni」について

以上のようなモンゴル語の正書法を念頭に置いて満洲語の「i/ni」を考えてみると、次のようなことが言えそうである。

満洲語の表記を作り上げる際にモンゴル語の正書法を参照し、「-n」で終わる名詞の後の助詞を「i」と綴りつつ、[ni]と読む習慣を踏襲した。「天聰汗錢」において「ni」と綴られたのは、実際の発音通りに表記した全くの例外である。

「-ng」の後で「ni」と綴ることについては二つの点を考慮しなければならない。その一は、吉池(2008)にも指摘されたように、満洲語の「-ng」が実際には[-n]と発音された可能性が高いこと。そのため、発音通りに「ni」と綴られた。その二は、モンゴル語において、「-ng」の後の「i」や「un」は「gi」「gun」と読まれるため、モンゴル語の正書法に慣れ親しんだ者に誤解なく[ni]と読ませるためには、どうしても「i」ではなく、「ni」と綴る必要があったということである。

このようにして、満洲語の属格助詞は「-ng」の後で「ni」、それ以外では「i」と綴る規則が出来上がったと考えられる。